

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「人類社会の進化史的基盤研究（3）-他者-」

日時：2013年7月27日（土曜日）午後1時～7時

場所：東京外大 AA 研棟 3階マルチメディアセミナー室（306室）

報告者：

1. 伊藤詞子（AA 研共同研究員・京都大学）
2. 西井涼子（AA 研）

内容

「他者とは誰か ―〈ある〉と〈もつ〉と〈する〉」（伊藤詞子）

1. 〈ある〉から〈する〉へ ―泡沫の世界

本発表では、発表者がこれから考察しようとする、チンパンジー社会における「他者」について、どのような出発点を取り得るかについて模索した。

その中で、他者には自己次第という側面があること、自己は可変的であること、従って、他者も可変的であることを整理した。こうした可変性や、自己（イメージ）においても他者が現れるような動態を踏まえるならば、「他者とは誰か」と問う出発点は間違いであろう。また、イメージとして現れる自己や他者そのものについて、言語を持たないチンパンジーで、それがどのようなものを考察するには限界がある。

一方、生命にとって、その誕生の瞬間を含めた一生のなかで、自／他の区分は常に同時に生成するという出発点に立つならば、自／他の区分が作動する可能性のある、区分が問題となる場面を検討することで、他者という問題にアプローチできないかと考えた。他者は、この場面において自己のイメージを同時に起動しつつ立ち現れる何ものかであり、そのイメージ自体は、近代の人間にとっては死活問題（特に自己イメージ）となるにしても、ここでは二次的な問題という位置づけになる。

具体的に扱う場面は、相互行為の過程でそれまでの流れが偶発的、瞬間的に、止まるような場面である。それは、危機的というほど大げさなものではないが、そのまま行為を続行するのも躊躇するような〈すきま〉である。今回扱った事例では、行為レベルでは相互行為に関わる二者が同時に止まるわけではなく時間差があった。すなわち、一方が途中で行為を止めることで、相手もそれまでやっていた行為を止めてしまうのである。その場に居合わせた第三者が介入することもあった。これらは、当事者にとっても〈すきま〉は観察され、なにがしかの影響を受けるようなものであることを示す。

こうした〈すきま〉が生まれた後、今回取り上げた事例では仕切り直すかのように新たに相互行為が始まった。直接相互行為している相手や、第三者が〈すきま〉を観察しているということも考慮するならば、相互行為の継続の中で自己の行為を止めることは、行為継

続が単に不可能だということだけでなく、同時に相手がそれに気づき、相手の出方が変わることを「待つ」ものとして現れていることのように思われる。もちろん、必ずそうなるわけではなく、気づかれないこともあるだろう。あるいは、瀕死の相手に対して手を変え品を変えて行為をしかける例では、何の反応も返ってこないという形で<すきま>だけが延々と生成するような場合もある。従って、仕切り直しは観察者である私にとって瞬間的に現れる<すきま>を見出す鍵となっているに過ぎない。また、相互行為がそのままに流れているときには<すきま>がないということでもなく、これも観察者にとっての観察可能性を確保する手続きに過ぎない。こうしたさまざまな限定や限界つきではあるが、こうした場面を検討することで自／他の区分が作動する基盤と、そうした区分の諸相を多少なりとも拾い上げられるものと考えている。

2. <もつ>と<する> 一仮のものの確からしさ

チンパンジー社会は離合集散という特質を持つ。その過程に於いては、誰にいつどこでどのように出会うかは予測も制御も不能である。つまり、「出会ってしまう」ことが多々起こる。多様な社会交渉で知られるチンパンジーであるが、こうした流動的な状況下で彼らはいつでも自由に相互行為を始めるわけではなく、むしろなかなか何も起こらない、いわば相互行為を開始することの難しさという側面について本プロジェクトの前身である、人類の進化史的基盤研究（2）の成果論集で議論した。

こうした出会いの場面に於いて挨拶という行動が見られることがある。パントグラントと呼ばれる特徴的な音声を、一方的に発する行動である。この行動は、劣位者が行う行動として、優劣関係の指標としてもっぱら利用されてきたが、優劣関係や順位関係との関係そのものについては様々な議論がある。すなわち、多くの霊長類では優劣関係は劣位者の行動抑制が見られるのに対し、チンパンジーでは劣位者の側が行動を起こすことや、単純に優劣関係に収まりきれない現象として現れることから、まだ多くの謎を残す行動なのである。人間がこの行動に優／劣という対立的な関係を想定することには、自己や他者の外部化に関わる問題群と深く関わっているように思われる。ここでは、この行動の離合集散状況下での現れ方から、<すきま>の操作性という問題として捉え直せるのではないかと考えているが詳細は今後の課題である。

2. 「自己の中の他者」（西井涼子）

本発表では、南タイの村落におけるムスリムの仏教徒としての出家というある種の祖先儀礼の事例から、人間の共同的存在を、あらかじめ定義づけずに、その時、その場でおこっている編成からみていくことを試みた。そのために ①個のレベルと②社会・共同体のレベル、それぞれについての他者論をみることで、両者をどのようにつなぐことができるのかを考察した。

調査村の特徴は、ムスリムと仏教徒がほぼ半々で混住し、異なる宗教間での通婚率が全

婚姻数の 20%にのぼることにみられる。異なる宗教が混在する村落に特異な慣行として、仏教徒の祖先が原因とされるムスリムの出家がある。つい 20 年ほど前までは、ムスリムの子供が病気になると、親や祖父母は誰か仏教徒が子孫に出家をさせたがっていると考えて願かけし、治癒すると出家させていた。たとえ明確に仏教徒の祖先の系譜が辿れない場合でも、こうした願かけは行われており、ムスリムと仏教徒が混住している村では現在の日常的な差異をもった他者を身体に取り込みつきあう術を心得ていたといえよう。それは現前している差異が必ずしも絶対のものではなく、他者が自己になり、自己が他者になりうる遇有性を秘めている関係性が日常の生に潜在していることを示していると考えられる。発表においては、自己と他者をめぐる個のレベルでの考察を、『心と他者』（野矢茂樹著）から、「私には到達しえぬ内なる心をもった他者」から、「新たな意味の発信源としての他者」「規範の他者」への道筋をしめした。野矢は、「心」もまた、あるものの性質を述べた言葉ではなく、他との関係の在り方を述べた言葉なのではないだろうかという。つまり、「私の心」そのものが「他者の心」と対になってしか概念化されないのである。

次に『他者と死者』（内田樹著）から、レヴィナスの主体性とは「同一者 - のうちなる - 他なるもの」のことであるという議論に着目する。まず他者の接近があり、他者の接近にほとんど「遅れて」それに「応答するもの」として主体性は到来する。その時に、〈生きること〉に着目すると、それによって生きている一私と「他なるもの」はその起源において相互に基礎づけあい、相互に支えあっている「絡み合い」としてみえてくる。「私」は「非一私」に「依存」するというあり方においてはじめて「私」なのである。「非一私」を絶えずおのれのうちに繰り込みつづける「とぐろを巻くような内回転の運動性」(enroulement)こそが「私」の本質をなしているという。こられの考察からは、個のレベルでは、自己の成立には他者の存在が不可欠であるといえよう。

次に、社会・共同体のレベルで人間の共同性と他者をめぐる考察は、まずは『交易する人間』（今村仁司著）から行った。個人の観点では偶然の出会いにみえるものでも、実は偶然ではなくて、制度や慣習がそうさせている。個人的には偶然の経験を必然的にするという。人間以外に、「人間でないもの」、「人間でなくなったもの」、「人間を超えるもの」もまた不可欠な条件として社会関係の形成に根本的に参加している。

また、『世界の儂さの社会学 シュッツからルーマン』（吉澤夏子著）は、ルーマンにとっての他者とは、どのようにしてもけっして到達しえない絶対の差異としてあり、「私と他者の共存」というパラドクスが隠蔽されるできごとに社会の生成をみる。つまり、社会・共同体のレベルにおいても他者の存在はその成立に不可欠である。

このように、個のレベルと社会・共同体のレベルの両者において、他者が不可欠であるという論理的相似性をみることができる。しかし、①と②がどのようにつながるのか、①から②への飛躍はどのように説明できるのかについては、さらなる媒介が必要である。それを、ジャン＝リュック・ナンシーの共同体論を導入することで試みた。つまり、共同体/社会はそのつどの出現であり、あらかじめ措定できないということを認めることからじ

めるのである。

ジャン＝リュック・ナンシーは、「共出現」において、「間に存在させる（割り入らせる）もの、それは必然的に最も共同なものである。だが最も共同なものは、与えられないがゆえに間に存在させるのであるとする。共同体/社会はそのつどの出現であり、あらかじめ指定できない。「例えば、社会編成ならびに政治的争点におけるさまざまな差異や、国家の諸問題、階級闘争、他の次元の諸差異や抗争といったものの中での継起、重複、不均衡は、共同の実態「へと」後から不意に到来する偶発事ではなく、「共同体」それ自体の不意の一到来なのである」とする。

近年、調査村でのイスラーム主義的な運動が浸透して、ムスリムの出家慣行は行われなくなっている。これまでの、自己の中の他者と折り合う方法が使用できなくなったときに、共同体はどう変化したのかであろうか。共同体そのものの崩壊であるのか、それとも方法を変化させて共同的なるものの志向性は存続しているのか。それとも、そもそも共同体は不変でずっと続いてきたのだろうか。それは、実際に出家することなく、出家の願を断つ儀礼をおこなうことで代替させたり、100歳になったら出家すると誓い、「この子供が将来とも幸福で繁栄するように願います。そしてこの子が100歳になったときに出家します」と唱える新たな方法論が実施されるときに、共同体は出現しているとみることもできよう。そして、そこで出現する共同体は、その儀礼や調停の方法が行われるその都度に形を変えつつ、しかし当事者にとってはずっと続けているものとして出現していると考えることができよう。ここでは他なるものは常に自己の中に在りつつ、また他なるものを含んだ社会において生活を営んでいるのである。

参考文献

- 今村仁司 2000『交易する人間（ホモ・コムニカンス）』講談社選書メチエ。
内田樹 2004『他者と死者 ラカンによるレヴィナス』海鳥社。
大橋完太郎 2013「かくも味わい深き他者の顔」『ユリイカ』8月号臨時増刊:83-90。
郡司ペギオ幸夫 2013「アンパンマンを食べることのできる者は誰だ—否定と否認の混同または脳内で命令できる他者に基礎づけられた自発性」『ユリイカ』8月号臨時増刊:73-82。
田辺繁治 2013『精霊の人類学 北タイにおける共同性のポリティクス』岩波書店。
ナンシー、ジャン＝リュック 2002「共出現—『コミュニズム』の実存から『実存＝脱自性』の共同体へ」『共出現』:65-145。
西井涼子 2001『死をめぐる実践宗教』世界思想社。
2013『情動のエスノグラフィ』京都大学学術出版会。
野矢茂樹 1995『心と他者』勁草書房。
吉澤夏子 2002『世界の儂さの社会学 シュッツからルーマン』勁草書房。